

今回は「仕事で一番大切にしたい 31 の言葉」という本からです

人よりほんの少し多くの苦勞、人よりほんの少し多くの努力で、その結果は大きく違ってくる。

(味の素 創業者 鈴木三郎助)

味の素の歴史は、鈴木三郎助と東京帝国大学教、池田菊苗博士の出会いから始まる。1908 年(明治 41 年)2 月、三郎助は紹介状を手に博士の研修室を訪れた。しかし、三郎助の期待したものと博士の研究テーマは違っていた。三郎助は、そのころ海藻からヨードを取り出す地行で成功。鈴木製薬所を経営する事業家になっていた。ヨードはミネラルの一種で、健康食品に成分や肥料に使われる。その殺菌作用を利用した消毒薬がヨードチンキだ。しかし、ヨード事業だけでは限界がある。何か面白い事はないか。三郎助のアンテナに引掛ったのが池田博士だった。1899 年(明治 32 年)、当時、東京帝国大学助教授だった池田は、最先端の物理・化学を学ぶためにドイツに留学。ドイツ人の体格と栄養状態の良さに驚き、「日本人の栄養状態を改善すること」を生涯の研究テーマに決めた。帰国後、博士が注目したのが昆布だし。きっかけは夕食時の子供たちの会話だった。その日の吸い物に昆布が入っていて美味しかった。「昆布を入れると、どうして美味しいの」「それは昆布の中に美味しいものが入っているからさ」子供たちの会話を聞いていた池田は、昆布だしの味の正体を明らかにする研究を思いついた。昆布だしの味は、味の 4 つの基本である。甘味、塩味、酸味、苦味とは違う。研究を重ね、1908 年に昆布だしの味の成分がグルタミン酸というアミノ酸の一種であることを突き止め、うま味と命名した。5 番目の味である。昔からカツオ節や昆布などにうま味があることは知られていた。博士はうま味を工業的に採取することに成功し、「グルタミン酸ナトリウムを主成分とする調味料製造法」の特許を申請した。同年 7 月にグルタミン酸の製造特許が確立した。8 月に池田は、三郎助に事業化を依頼した。もともと、三郎助は、大きな相場を張るスリルがたまらなく好きな相場師だった。同年 9 月、男の前厄の年に大きな大勝負に出た。特許を買い取るのではなく、特許を共有して、共同経営の形にした。三郎助は、「商売のほうはワシが引き受けます。先生には儲けの 3%を差し上げます」という破格の条件を提示した。グルタミン酸製造工業は故郷の神奈川県葉山に建設した。製造は弟の忠治(後の昭和電気工 2 代目社長)が担当。原料を小麦に求めた。しかし、技術的になかなか難しい。実験は幾度も失敗し、資金はたちまち底をついた。「できた! できた! 」と忠治から知らせが入ったのは、三郎助が金策に駆け回っている最中だった。駆けつけると、忠治の掌には白い粉末が載っている。三郎助は指でつまみ、口に入れてみた。「美味しい! 」と思わず叫んだ。あと、マーケティングで重要なのは、商品ネーミングだ。当初、「味精」(みせい)と名付けた。これでは薬のようで親近感が湧かない。長男の三郎が提案したのが、「味の素」だった。五音で呼びやすい。後に三代目三郎助を襲名する三郎は、まだ、18 歳だった。斬新な広告で日本の食卓に革命をもたらし、広告宣伝の天才と謳われた三郎の感性は、このネーミングに現れている。1909 年(明治 42 年)5 月 20 日「味の素」の販売を開始した。宣伝を全面的に任せられた三郎は、東京朝日新聞に大きな広告を出した。しかし、スタートは芳しくなかった。それでも諦めず、苦勞を重ねて「味の素」は商品として世の中に認知されるようになった。人々は、こぞって耳搔きひと匙の白い粉末を料理に使うようになった。「人よりほんの少し多くの苦勞、人よりほんの少し多くの努力で、その結果は大きく違ってくる」鈴木三郎助に含蓄に富む言葉である。

池田博士は生涯の研究テーマを何にしましたか?

()

鈴木三郎助に含蓄に富む言葉は何ですか?

()